



Title	Essays on Consumption Externalities and Optimal Policy
Author(s)	中元, 康裕
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49344
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【8】

氏 名	なか もと やす ひろ 中 元 康 裕
博士の専攻分野の名称	博士（経済学）
学 位 記 番 号	第 22651 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 経済学研究科経済学専攻
学 位 論 文 名	Essays on Consumption Externalities and Optimal Policy (消費の外部性と最適政策に関する論考)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 二神 孝一 (副査) 教 授 三野 和雄 准教授 小野 哲生

論文内容の要旨

本論文では、消費の外部性が経済に与える影響と、市場経済が中央計画経済の最適な経済経路を模倣するための最適政策に関する一連の研究成果をまとめている。

1章では、Becker と Mulligan(1997)による内生的時間選好率を組み込んだマクロ動力学モデルにおいて、消費の外部性が経済に与える影響と、市場経済が計画経済を模倣するような最適政策について分析した。特に、他人の消費への嫉妬心によって個人は消費を過大評価させ、将来志向の投資活動を軽視してしまう。そこで、自分の忍耐の程度を表す割引率

が大きくなり、将来の消費を軽視させてしまう結果、市場経済は計画経済に比べると長期的な消費水準は高く、資本ストックは低くなることを証明した。市場経済が計画経済を模倣する最適税政策を分析した。

2章では、資産を保有することに願望を持つ個人の選好（資産選好）を組み込んだ場合に、消費の外部性が経済にどのような影響を与えるかを調べている。資産選好を加えた場合、資産効果が消費の成長に影響を与える。そこで、個人が他人の消費に嫉妬する場合、その資産効果が計画経済に比べて弱くなり、消費の成長を抑えてしまう。短期的には、市場経済の消費水準は計画経済のそれに比べて高くなり、貯蓄水準は低くなる。そして、その低い貯蓄水準は将来の産出量を低くしてしまうため、市場経済の長期的な消費水準と資本水準は計画経済のそれよりも低くなる。このような市場経済の計画経済との乖離は、消費税と資産に関する所得税によって改善することができる事が示された。

3章では、異質な個人を想定することで、消費の外部性が経済の安定性に与える影響を分析している。異質な個人の存在によって、消費の外部性の新たな効果を観察することができる。つまり、グループ内の消費の外部性に加え、グループ間のそれが新たに加わる。その結果、グループ間の消費の外部性の影響が大きい場合、経済の均衡の安定性はサドル安定的な均衡から、不安定や不決定といった均衡の性質にも影響を与えることの可能性を解析的に示した。

4章では、消費の外部性が定常均衡へ向かう経済の収束速度に与える効果を数値計算で分析している。特に、消費の外部性に加え、他人のレジャー活動に対する嫉妬心を表す娯楽の外部性を新たに加えることで、それらの違いも考察している。結果、消費の外部性は経済の収束速度に大きな影響を与えるのに対し、娯楽の外部性はそれほど大きな影響はないことを示した。その理由は、娯楽の外部性は家計の労働時間に影響を与える結果、生産面にも影響を与え、外部性の収束速度に与える効果を相殺してしまうからである。

論文審査の結果の要旨

本研究は、時間選好率の内生化の分析、消費の外部性と資産選好を同時にモデル化するというオリジナリティの高い研究を行っている。また、そのような外部性を内部化するための最適課税政策という非常に優れた研究を行っている。さらに数値解析の手法を用いて異質な個人が存在するケースなどの安定性分析を行う意欲的な研究を行っている。以上から、博士（経済学）に十分に値すると判断する。